

インドサイを運ぶ

原 宏 太 郎

How I brought Indian Rhinoceros from India

Kōtaro Hara

インド政府から寄贈の「インドサイ」を引取るためインド、カルカッタ市まで出張を命ぜられたとき、これはえらいことをお世につかつた。はたしてこの重責を完遂することができるだろうかという不安、その反面種々のものを見聞できるという期待、これらのことが常に脳裏を去来しました。このような期待と不安をいさながら6月25日羽田空港をあとにしました。

目的地カルカッタ市のダムダム飛行場に到着したのは夜半近くでした。総領事館員稲川氏、三井船舶駐在員小島氏の出迎をうけ、牛糞臭い街を通り、宿舎におちつきました。

カルカッタ市は御承知のように、英国がインド統治の拠点として建設した街で、フグリー河にそいマイダン（広場）を開むようにしてできており、近代的な街でした。ただ非常にカラスと牛が多い街でどこへ行っても、この二つにはぶつかりました。

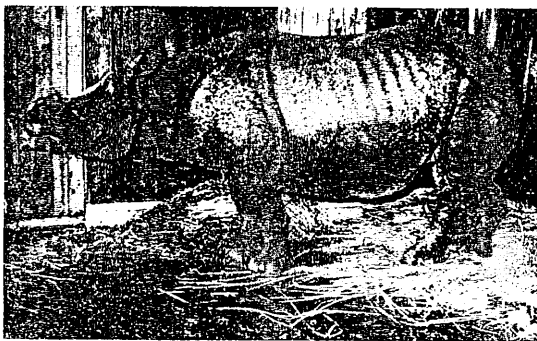
さて私が連れて帰る「サイ」は、はたしてこのカルカッタにきているだろうか、まだアッサムの奥地より輸送中だろうか、と、日本を出発するときから気になっておりました。そこで到着するとすぐに、領事館の方に「私の持って帰るサイはもうカルカッタにきているでしょうね」と櫻換もそこそこに聴いてみました。というのは、現在多摩に飼育中のおすサイを引取りに行った動物商社のA氏が、カルカッタに動物がいるということで出かけて行き、そこにはなく、アッサムまで行き、6カ月もインドにいたことがあったからです。はたせるかな総領事館の方の返事は、インド側よりサイについて連絡はなく、どこに置いてあるか不明とのことでした。サイさがしをしなければならぬハメになってしまいました。

サイをさがすにしても、動物輸送のための種々のことを援助、協力してもらうにはやはり動物園と思い、まず最初に動物園をたずねることにしました。

6月29日私達はアプー動物園を訪ね、ラヒリ

一園長に逢い、古賀園長よりの書状を渡し、来訪の目的をつげました。ところが園長は、東京に行くサイはすでに6月6日アッサムより到着しており、12日に出産し親仔共に健在であるとのことでした。はからずもサイの居場所がわかった次第です。

職員の方の案内でサイの親仔に初対面いたしました。



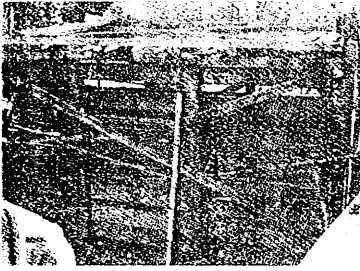
無事多摩動物公園に到着したインドサイ（めす）

た。カバの飼育場の隣りの動物舎に仮収容しており、親は産後のことで、多少やつれている感じがしましたが、案外元気で、子供は親のそばをはなれず、あとをおってチョコチョコと歩き回ったり、乳をすったりして誠に可愛いものでした。これを見ているうちに、多分東京にどのようにするか

問合せても、親仔とも持って帰るようについて来るだろう、輸送は大変だが、古賀園長始め日本の子供達はよろこぶだろう、親仔を持って帰るよう全力をそそごうと思いました。しかしインド側にて果して親仔共にくれるものか、わからないので、ラヒリ一園長にその旨を問いましたが、中央政府よりなんら指示を受けてないということでした。ここで私はインド人が大変にのんびりしていることを知りました。普通日本の場合であれば、仔ができれば関係方面へ連絡し、どのようにするか、引取人が行くまでに決めてあり、また輸送の困難な場合は引取人の出発を延期してもらうなどの手配をするものですが、それらのことは一切やってなかったようです。

インド人ののんきなことに感心ばかりしておったとしてもいつになったら帰れるかわかりません。総領事館の方と相談の結果、交渉は館員の末木氏がして下さることになりました。そこで船の方は三井船舶の小島さんをお願いし、私は技術的なことについてお手伝いをすることにしました。

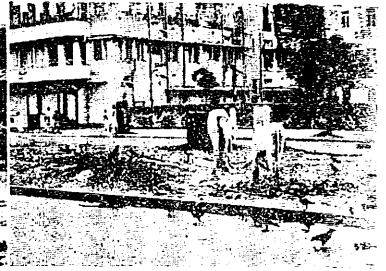
早速デリーの日本大使館に当地の事情を報告し、インド中央政府の意向を問いただして頂きましたところ、親仔共に持って帰れるようであれば持ってゆく



サイを運ぶ箱（筆者写す）



牛が歩るいているカルカッタの市内
（筆者写す）



同じくカルカッタ市内風景。カラスと牛はど
こへ行っても見うけられました（筆者写す）

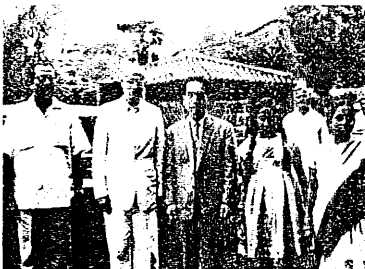
うにとのことでした。

そこで私達は親子の輸送のため、東京との連絡をとりながら着々と準備を進めてゆきました。輸送のためには親子を一たん引分けなければならず、この作業はアリプール動物園にお願いしました。しかしこの作業がなかなか困難でちちとして進まず、最初予定していた乾隆丸に積込み不能とわかり、他の船をさがさなければならぬ事になりました。幸い皆様のお蔭にて、親はカルカッタ丸にて、仔はパンアメリカンの飛行機で運ぶという手はずが決りました。当方の準備は次第にととのって来ましたが、インド側は相変らずのんびりしていて大体何日に親子を渡してくれるか、さっぱりわかりません。そうこうしているうちに7月も12日となり、18日出航のカルカッタ丸に間に合うかといささか心配になってきました。ところが13日ラヒリー園長より連絡あり、親だけ渡すとのこと、早速茨木氏と同道たしかめましたところ、仔はくれないことが判明しました。われわれ一同ガッカリしました。しかし頂くものであり、当方の勝手なこともいえず、早速積込みのための準備にかかりました。14日にいたりサイの親子の分離に成功、仔の餌付けに成功したという連絡あり一安心いたしました。サイの積込み、飼料の収集はアリプール動物園にお願いして、私は帰国手続をいたし、18日にカルカッタ丸に乗込み、サイの

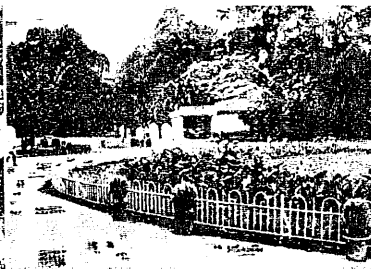
到着を待ちました。19日朝、私は船の甲板上でサイの到着をいまいかまかとまっていた。約束の8時半をすぎても着きません。一抹の不安が起きてきました。しかし茨木氏も朝から動物園に行って、ついて来て下さることだし、間違いはなかりと心を静めておりました。そうこうしているうち11時近くなって到着、11時半すぎに無事、甲板上の所定の位置にサイを積込むことができ、ホッとしました。

かえりみればカルカッタ到着以来20数日間あてもない、こうでもないとのびのびになり、時にはカンジャクも起り、時にはアタマに来るようなこともありましたが、どうやら船に積込むことにコギつけたのでした。全くここまで来たのは、茨木氏、小島氏の献身的な御協力、その他在留邦人の方々の御厚意のお蔭でした。

19日午後3時、想い出多いカルカッタをあとに船は岸壁を離れ、フグリー河を下り一路日本に向ったのでした。そして私の船での仕事が始まったのです。第一に心配なのは船酔いのこと、次は箱がこわれた場合はどうするかということでした。箱はかなり頑固に作ってありましたが、サイが本気になればこわれます。船長や一等航海士の方々が心配され大丈夫かと良くきかれました。だいじょうぶ心配はいりません、箱より出るようなことはありませんと明言していたものの内心



左よりカルカッタ・アリプール動物園のラヒリー園長、ロウ前園長、筆者、園長令嬢、園長夫人です。



アリプール動物園所見（筆者写す）



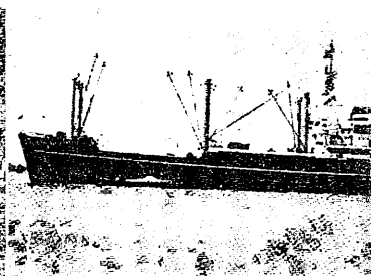
同左、うしろの建物は猛獣舎です（筆者写す）



プールの近くに憩うインドサイの母と子
(筆者写す)



お乳を飲んでいる赤ちゃんサイ(筆者写す)



インドサイを運んだかるかつ丸。

はおだやかでありませんでした。幸い何事もなく終わりました。21日朝起きだしてみると、ベンガル港に出た船はおりからの季節風を受けて、動揺し、かなりゆれております。起きてみると大変に気持ちが悪い。サイはいかにも甲板に出て見るとさすがにつらいらしく横になっていることが多く、立つと左右にゆれるので、そのたびに箱にぶつかり、箱がゆらゆらゆれる、その上、餌の食べ方も悪くなってきました。さて困ったことになったと思い、とくかく食べさせることが第一だと種々考えました。

ところが私と一緒にサイを世話して下さることになった船員の平谷氏が幸にも、かつて高松の栗林動物園副園長香川氏がアフリカより動物を持って帰られたとき動物を世話された方で、その時の経験によって、サトウキビがよいとのこと、これを多く与えることにしました。私も林所長がやはりアフリカより帰るとき、砂糖水をのませたことを思い出し、餌に砂糖水をまぜてやることにしました。

そのうちサイも私も船に慣れてきて、波の高い船のゆれる日は多少餌の食べも悪くなりましたが、最初の時のようなこともなく、航海の終りごろには食欲が増してきました。

船は定期船であったため、ラングーン、ペナン、シンガポール、香港に寄港しました。このため途中で、

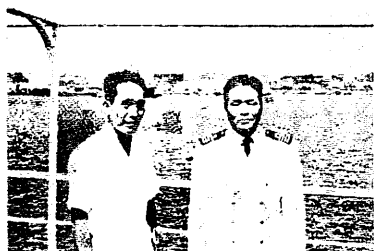
青草や、サトウキビを補給することもでき、水もふんだんに使わせて頂くこともできました。また航行している期間が港と港の間の短期間のため、船酔いにもあまりかからずすごすことができたことは大変に幸いでした。

また船長以下乗組員の皆様が大事な荷物を運ぶのだからと大変な気のつかいよう、台風をよけたり、波が箱にかぶらないようにして下さったり、動物園のある土地に寄港すれば、そこに案内して下さったり、サイも私も大変なもてなしを受けました。

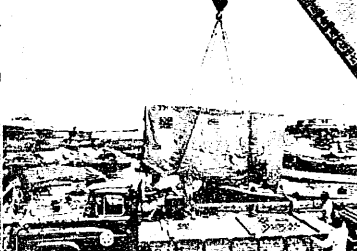
このように皆様の厚意につつまれて8月15日横浜港に無事到着、翌16日夕方多摩動物公園の新サイ舎に、めすサイを収容することができました。おもいおこせば50数日の間事故もなく、無事大任を果たすことができましたのは、この輸送に協力して下さった皆様方のお蔭と深く感謝しております。

私が連れて来ましためすサイはやがておすサイと一緒に将来、カルカッタに置いて来た子供と同じような可愛い子ができることを期待しております。

(多摩動物公園)



かるかつ丸の船長さんに大変お世話になりました。



長い航海を終えてインドサイは箱のまま積みおろされました。



多摩動物公園に到着して、まず水を飲みました。